

中央銀行の独立と為替レート

「スプートニク モーメント」、久しぶりに聞く言葉が昨日は世界をにぎわせた。米国が圧倒的にリードする AI の分野で中国のスタートアップのディープシークが、米国のオープン AI に匹敵する AI モデルを開発したことが分かったからだ。それもはるかに低コストでだ。

主にテクノロジーと通貨ドルの優位性をバックに、それらを利用して一層米国の地位を高めようとするトランプ政権にとってサプライズであったには違いなく、トランプ大統領も演説の中でこの点にわざわざ言及した。先端技術品の中国への輸出禁止などで中国の発展が頭打ちになると高をくくってはダメだということだ。

と言ってもこれで米国の優位性が揺らいだことにはならない。ディープシークには潜在力などでまだ不明な点もあるようだからだ。それにオープン AI を始め米国の AI の発展を担う者たちも大いに刺激され、より先端的な AI の開発に力を注ぐ契機になるからだ。

ただ米国の優位性が将来揺らぐ可能性が現実的に考えられる時代になったとは言える。

となれば自国第一主義を掲げ世界に対して強圧的な姿勢で臨むトランプも妥協の幅が少しは広がるかもしれない。

こうした強圧的な姿勢は国内向けにも発揮される。先日トランプは金利については FED よりも自分の方が理解していると公言した。大谷に対して自分の方が野球がうまいと言っているようなものだ。FED に対する利下げ圧力であることは明白だ。

大統領あるいは首相が露骨に中央銀行の政策に介入するのは先進国では珍しい。ロシアのプーチンだって少なくとも表立ってはしない。露骨な介入で最近有名なのはトルコのエルドアン大統領だ。インフレ抑制のためには利下げが必要との考えで、利上げをした中央銀行総裁を次々に交代させた。利下げ、通貨安、インフレ上昇の悪循環から脱出できず、ついには自己の考えを封印して利上げでインフレを抑制する政策を容認した。政策金利は 8.5% から 50% へと段階的に引き上げ、80% 以上に上昇したインフレ率は直近では 40% 台に下落した。金利も昨年末に利下げに転じた。だが通貨リラは依然として安値水準にあり、過去の政策の傷跡がまだ癒えていない。

米国はドルが強いのでトルコとは比較にならないが、政策を誤り続ければ米国でもその報いは免れられない。米国は中央銀行の独立を維持しているので大統領と言えど FED 議長のパウエルを本人の意思に反して任期中に首にはできない。

トランプが利下げを望んでも、今日の FOMC では政策金利は現行のままだろう。金融市場では 6 月に 0.25% の利下げと年内にもう一度の利下げを見込む。トランプの政策は一般的にインフレ上昇に繋がると見られるものが多いので、こうした利下げシナリオが変わる可能性もある。その場合トランプの圧力が強まりパウエルが嫌気を差して辞任と言う展開になるかもしれない。事実上中央銀行の独立の崩壊だ。

テクノロジーとドルの優位性を力の源泉とする米国がその土台を侵食されるかどうかは、中国のテクノロジーの発展にもかかるが、一義的にはトランプ政権の政策の成否にかかっている。